

紀要

36

- 初期土偶から中期土偶への展開を読み解く
 —精霊像としての土偶に関する認識の更新と深化を課題として—…………… 瀬口 眞司（1）
- 古墳時代の「石杵」状石製品について
 —蒲生郡日野町播沢遺跡出土事例の紹介—…………… 辻川 哲朗（17）
- 群集墳の築造と被葬者像
 —太鼓塚古墳群を素材として—…………… 堀 真人（24）
- 古墳時代の大刀形製品にかかる覚書…………… 宮村 誠二（40）
- 長浜市八雲書院資料調査報告＜瓦編2＞…………… 福井 知樹（45）
- 遺物三次元計測の実験的試行…………… 山田梨紗子・福井 知樹（64）
- 滋賀県埋蔵文化財地域展Ⅳにおける試みとその成果
 —「広げる」「深める」「育てる」「つながる」展示へ—…………… 木下 義信（78）

初期土偶から中期土偶への展開を読み解く

—精霊像としての土偶に関する認識の更新と深化を課題として—

瀬口眞司

目次

1. 序論
2. 本論
3. 結論と展望

— 論文要旨 —

縄文時代の初期土偶から中期土偶への展開を主題に据え、その認識の更新と深化を試みた。

土偶には、①顔のない土偶と、②顔のある土偶の二者がある。①は「依代としての土偶」であり、霊的存在がまだ取りついていないので、顔は表現されていない。その代わり、その造形の上端部付近には、霊的存在が取りつくための重要な要素として〈うつろ〉が必ず表現されていた。かたや②は「精霊像としての土偶」であり、霊的存在が取りついているので、顔が表現されている。時期的に見ると、①は初期土偶の段階から存在し、②は中期以降に本格的に付加されるようになったことが分かっている。また②はその後、爆発的に増加したことも知られている。

本稿で問題にしたのは、上記②における依代的な要素の有無である。「精霊像としての土偶」は、依代的な要素をもたずに爆発的な増加を果たしたのか、あるいは依代的な要素もまだ併せ持ちながら展開したのか。この問題の解明は、土偶祭祀の展開を読み解いていく上でも重要な作業となる。

そこで本稿では、依代としての重要な要素——霊的存在が取りつくための〈うつろ〉表現——のあり方に着目した上で、その〈うつろ〉表現が「精霊像としての土偶」にも継承されているのか／否か、継承されているならば、どのような展開をもって受け継がれていたのかといった点を問うた。

検討の結果、〈うつろ〉表現は、様々なバリエーションを派生させながら「精霊像としての土偶」にも脈々と受け継がれていることが確認できた。また〈うつろ〉表現が配置される部位についても、当初は頭部前面だが、中期土偶の段階に移行する前後の時期に頭部上面へ転移し、さらに背面へ再転移していく展開も見出せた。

以上のように、「精霊像としての土偶」は依代的要素を廃したものではなく、依代的要素も併せ持つものとして展開していったことが理解でき、顔面を取りつける／描くという製作作業を通して霊的存在がインストールされたものではあるが、使い手が使用する段階においても、依代として霊的存在を取りつかせられる作りになっていたことが認識できた。精霊像として完成された造形であるだけでなく、霊的存在を幾重にも取りつかせられる依代でもあったことになる。以上の検討により、土偶祭祀の実態と展開を読み解いていく上で、重要な認識の更新と深化ができた。

——— キーワード

縄文時代 土偶 意味・役割 初期土偶 中期土偶 展開 依代 精霊像

1. 序論

(1) 本稿の主題

土偶とは何か？——筆者の研究テーマは、土偶の意味や役割をできるだけ実証的に検討し、先の問いに答えていくことである。その一環として、初期土偶から中期土偶への展開を主題に据え、認識の更新と深化を試みてみたい。

ここでいう初期土偶とは、日本で土偶が出現した時期のものを指す。縄文時代草創期前半から縄文時代前期末まで（およそ 15,000 ～ 5,500calBP）のもので、掌中に収まるほど小さく、板状で顔のないものが一般的である（図 1-1 ～ 11 ほか）。初期土偶関連資料と呼ぶ場合は、旧石器時代後期に遡るものや石製のものも包括することになる。

中期土偶とは、縄文時代中期の土偶（およそ 5,500 ～ 4,420 年）を指す。立体的で顔のある土偶（図 1-12 ～ 15）が顕在化し、土偶の数も爆発的に増加した段階のものだ。

本稿で主題に据えるのは、この初期土偶の段階から中期土偶の段階への具体的な展開である。以下、まずは先行研究と筆者の認識を整理し、課題と論点を設定してみたい。

(2) 先行研究ならびに本稿の課題と論点

A. いわゆる河童形土偶の出自に焦点をあてた議論

本稿の検討を進めるにはいくつかのアプローチがあり得るが、まず参照しておくべき重要な先行研究は、河童形土偶と呼ばれる有脚立像土偶の出自と展開に関する議論だろう。

縄文時代前期以前の初期土偶の形態は板状を基本とし、自立しないのが一般的だが、中期になると河童形土偶と呼ばれる有脚立像土偶が出現した。有脚立像土偶とは立体的で自立する土偶を指す。河童形土偶とは逆台形状の頭部をもち、頭部上面が広く、そこが河童の頭のように皿状を呈するものである。この河童形土偶を嚙矢として有脚立像土偶が成立し、中期土偶へ本格的に展開し始めたと言われる。1990 年代、そのような観点から河童形土偶の出自と展開について活発な議論が交わされた。

その議論は大別して 2 つの立場から交わされた。第 1 の立場は、河童形土偶の出自を東北地方の資料（図 1-11 など）に求めるもので、東北地方から北陸地方へ展開する中で河童形土偶として具象化され（図 1-15）、それが中部地方へ波及したとする考え方である（原田 1995・1997a・1997b・1998 など）。

第 2 の立場は、中部高地とその周辺における初期土偶の存在（図 1-7 ～ 9）を重視し、河童形土偶の出自を中部高地の中に求め、そこで成立・展開したとする考え方である（今福 1998・2000、櫛原 1998）。

これらの議論をとおして、広い視野と徹底した資料観察が進められ、前期後葉から中期後葉にかけての緻密な編年観も整備された（図 4 ほか）。その学問的果実は極めて大きい（1）。ただ残念なことに、河童形土偶の出自を裏付ける資料は十分とは言えず、いずれの立場も決定打が放てな

かったため、議論は膠着状態にある。河童形土偶の出自に焦点を当てた認識の深化に関しては、いまだ静視すべき状態にあるようにみえる。

B. 筆者の認識

一方、筆者は別の関心と観点から、上記とは異なる方向で認識を述べてきた（瀬口 2013・2015・2018・2020・2021 ほか）。その核心の 1 つは、初期土偶を α 態「依代としての土偶」と捉え、中期以降を β 態「精霊像としての土偶」が付加された段階と位置づけるところにあり、それを踏まえて初期土偶から中期への展開を論じてきた（図 3）。その詳細は拙稿（瀬口 2019 ほか）を参照されたいが、論旨は以下のとおりとなる。

ポイントは、初期土偶における 2 つの重要な特徴である。特徴 1 は、頭部パーツ〈甲〉と胴部パーツ〈乙〉が別々に作り分けられていることだ（図 2）。このうち〈甲〉とは頭部・顔面を表現したもので、胴部以下の表現はごく曖昧なもの／ないものである（図 2-（1））。かたや〈乙〉とは胴部を表現したもので、頭部・顔面の表現はごく曖昧なもの／ないものである（図 2-（2））。重要なのは上記の 2 つのパーツが補完関係にあることだ。初期土偶の基本的デザインは、〈甲〉と〈乙〉が一体化することで初めて完全形へ近づくように設計されている（2）。

さらに注目すべきポイントは、〈乙〉の造形の上端付近にある。そこには頭部・顔面が曖昧／ないかわりに、何もない空虚な空間——穴や凹み・空白といった〈うつろ〉な表現——が必ず用意されている。この点もまた、初期土偶の意味や役割を考える上で重要だ。〈甲〉をプラグとするなら、〈乙〉は〈甲〉が取りつくソケットとしてデザインされていることが見出せるからである。〈乙〉の胴部上端中央に用意された〈うつろ〉な表現とは、〈甲〉が取りつくための受け皿だったことが認識できるだろう。

特徴 2 は、〈乙〉に比べて〈甲〉が極端に少ないことだ。初期土偶における〈乙〉の例は、東北から九州にかけて 130 点を超すが、〈甲〉の出土例は 5 点に満たない。〈乙〉に比べて 5 % 未満しか具象化されていないことから、初期土偶の段階における〈甲〉とは基本的には可視化されないものであり、イメージの中だけで姿を現す観念的で心象的な存在、つまりは精霊のような霊的存在として取り扱われていたことが見て取れる。

以上のことから、初期土偶の段階とは、霊的存在のインスツールを待つ「依代としての土偶」（図 3-（1））が具象化されていた段階だと位置づけられる。基本的な姿は、〈乙〉として造形されており、顔がなく、その造形の上端付近に、依代としての重要要素——霊的存在が取りつくための受け皿としての〈うつろ〉——を必ず表現するものである。

かたや中期以降のあり方は以下のとおりとなる。顔のない「依代としての土偶」も引き続き造形されているが（図 1-12）、重要なのは、顔のある土偶が新たに付加されたこ

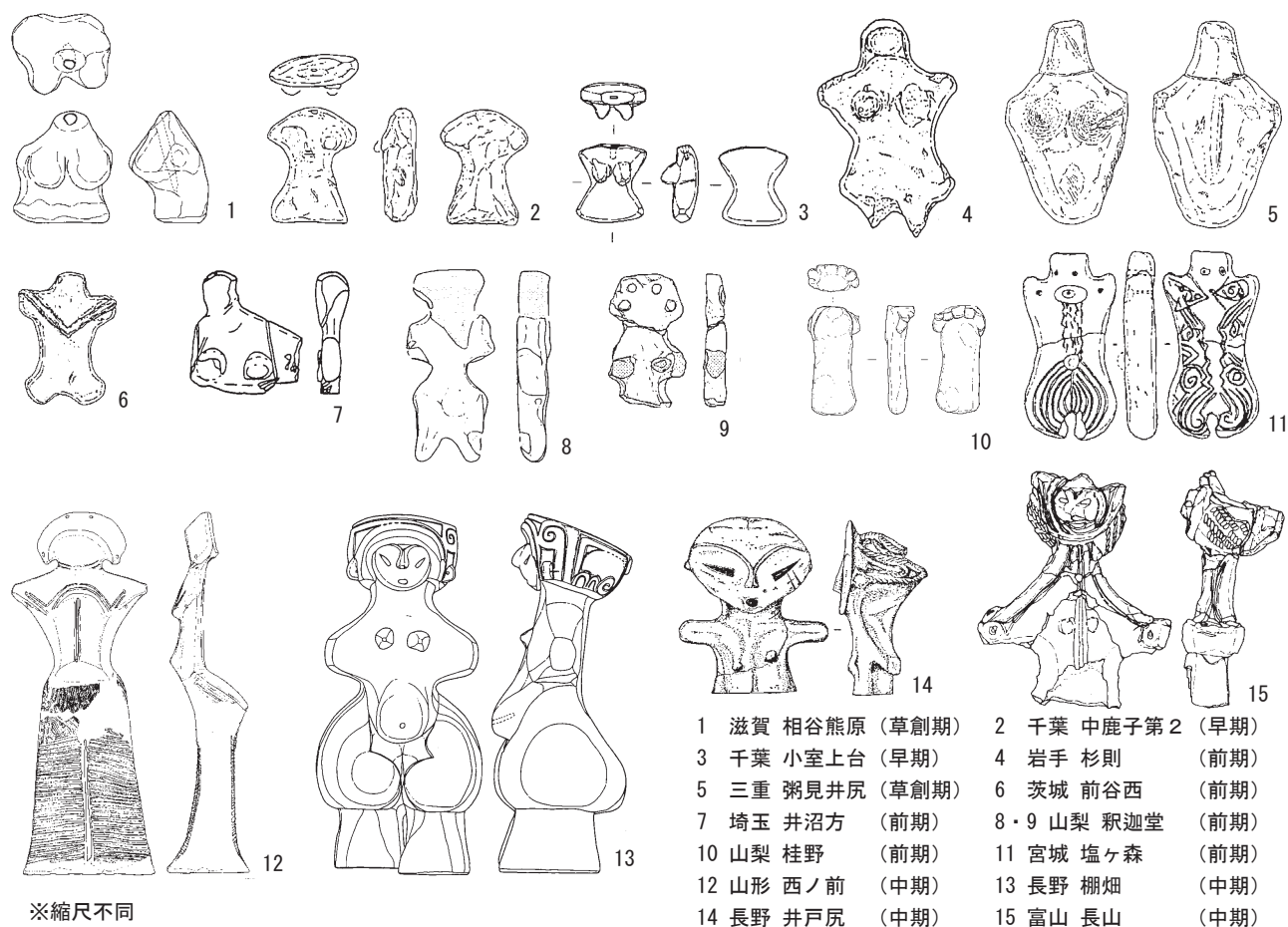


図1 初期土偶（1～11）と中期土偶（12～15）

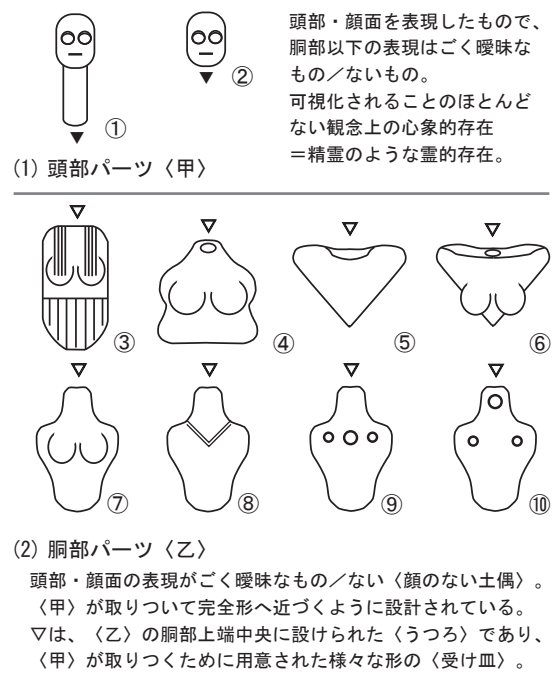


図2 初期土偶関連資料における〈甲〉と〈乙〉

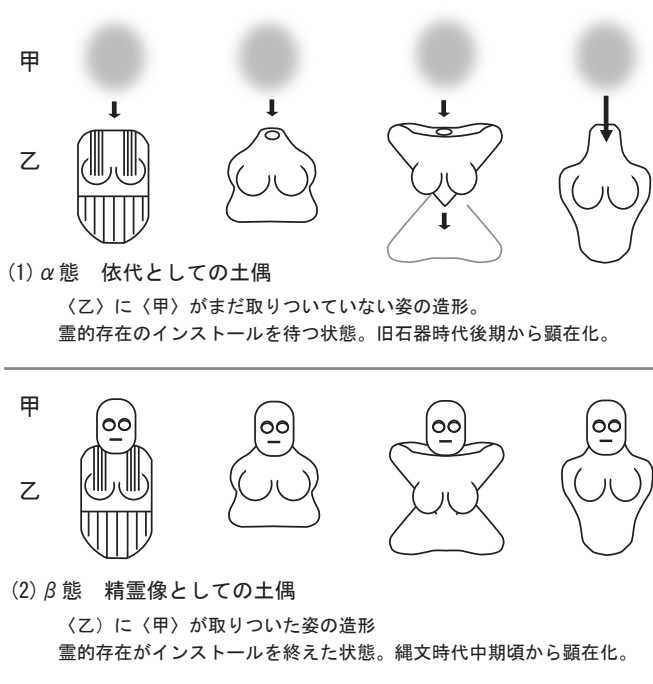


図3 依代としての土偶と精霊像としての土偶



図4 初期土偶後半期（前期土偶）から中期土偶への展開に関する先行研究例

とだ(図1-13～15)。この顔のある土偶とは、〈甲〉が〈乙〉に取りついた姿を具象化したものにほかならず、霊的存在がインストールされたいわば「精霊像としての土偶」として造形されたものである(図3-(2))。縄文時代中期とは、「依代としての土偶」に「精霊像としての土偶」が新たに付加された段階であり、後者が爆発的に増加・展開した段階だと認識できるだろう。

C. 本稿の課題と論点

以上が、初期土偶の段階から中期土偶への段階への展開に関する筆者の認識である。課題はまだいくつもがあるが、最も重要なものは「精霊像としての土偶」に関する認識の更新と深化だ。

筆者のこれまでの認識はごくシンプルで、顔面としての〈甲〉が取りついたことをもって「精霊像としての土偶」

の位置づけをしてきた。しかしそれが、依代的要素を廃したもの(A)なのか、あるいはまだ依代的要素も併せ持ったもの(B)なのか、といった点は見過ごしている。(A)の場合は、作り手の中にある焼成前の段階に、顔面を取りつける／描くという物理的なプロセスによって霊的存在を造形の中に取りつかせたことになり、使い手は、完成した既成品として精霊像を手にするようになる。かたや(B)の場合は、(A)と同じプロセスを経るが、使い手が使用する段階においても霊的存在を重層的に取りつかせ得るという点で異なる。祭祀の実態とその展開を読み解いていく上で、この区別を実は看過できない。

ここで重要となる論点は、依代としての重要要素である〈うつろ〉表現——穴や凹み・空白といった何もない空虚な空間の表現——が「精霊像としての土偶」にも継承され

表 1 対象資料一覧

No.	遺跡名	所在地	分類	時期	挿図出典・引用文献
1	釈迦堂	山梨 笛吹市	A1	黒浜式併行期	榎原1998 図5-3
2	釈迦堂	山梨 笛吹市	A1	黒浜式併行期	榎原1998 図5-1
3	天神	山梨 北杜市	—	諸磯b式期	榎原1998 図5-6
4	獅子之前	山梨 甲州市	—	前期	榎原1998 図5-11
5	獅子之前	山梨 甲州市	—	諸磯b式期	榎原1998 図5-5
6	獅子之前	山梨 甲州市	—	諸磯a～b式期	榎原1998 図5-4
7	一の沢	山梨 笛吹市	—	諸磯b式期	榎原1998 図5-9
8	釈迦堂	山梨 笛吹市	—	前期	榎原1998 図5-10
9	獅子之前	山梨 甲州市	—	諸磯b式期	榎原1998 図5-7
10	釈迦堂	山梨 笛吹市	A2	黒浜式併行期	小野ほか1987
11	大曲輪	愛知 名古屋	A2	前期後葉	伊藤・河合1993
12	大曲輪	愛知 名古屋	A2	前期後葉	伊藤・河合1993
13	黒熊第5	群馬 高崎市	A2	前期後葉	茂木1983・1988
14	桂野	山梨 笛吹市	B1	十三菩提式期	市川1999
18	宮ノ前	山梨 山梨市	C1①	* 五 I 式古	今福1998 第1図-5
19	俎原	長野 塩尻市	C1①		今福2000 第11図-4
20	向畑	長野 松本市	C1①	* 五 I 式新	今福1998 第1図-10
21	釈迦堂	山梨 笛吹市	C1①	* 五 I 式新	今福1998 第1図-12
22	梨久保	長野 岡谷市	C1①	五 II 式古	今福1998 第1図-11
23	棚畑	長野 茅野市	C1②	五 II 式新～貉沢式期	今福1998 第2図-1
24	小丸山	長野 塩尻市	C1②	五 II 式古	今福1998 第1図-20
25	荒神山	長野 諏訪市	C1②		今福2000 第9図-5
26	古林	山梨 北杜市	C1②	貉沢式中～新	今福1998 第6図-9
27	東反	長野 東御市	C1②	五 II 式中～新	今福2000 第5図-9
28	前田耕地	東京 あ市	C1②		今福2000 第11図-8
29	徳前C	石川 中能登町	C2①	* 新保・新崎式期	今福2000 第4図-4
30	下向山	山梨 甲府市	C2①	* 五 II 式古	今福2000 第13図-1
31	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2①	五式期	今福1998 第1図-3
32	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2①	五 II 式中	今福1998 第1図-13
33	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2①	五式期	今福1998 第1図-21
34	宮之上	山梨 甲州市	C2①	貉沢式古	今福1998 第2図-2
35	宮之上	山梨 甲州市	C2①	貉沢式期	今福1998 第5図-5
36	田村原	長野 豊丘村	C2①	貉沢式期	今福1998 第2図-4
37	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2②	* 五 I 式古	今福2000 第2図-1
38	上の平	山梨 甲府市	C2②	* 五 I 式新～II a式期	今福1998 第1図-15
39	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2②	五式期	今福1998 第1図-4
40	上の平	山梨 甲府市	C2②		今福2000 第14図
41	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2②	五式期	今福1998 第1図-22
42	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2②	五式～貉沢式期	今福1998 第2図-3
43	宮之上	山梨 甲州市	C2②	五 II 式新	今福1998 第5図-3
44	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2②	貉沢式期	今福1998 第6図-1
45	国分	山梨 笛吹市	C2②	貉沢式古	今福1998 第6図-3
46	田村原	長野 豊丘村	C2②	五式～貉沢式期	今福1998 第2図-5
47	当町	山梨 北杜市	C2②	* 五 II 式新～貉沢式古	今福2000 第10図-1
48	宮之上	山梨 甲州市	C2③	五 II b式期	今福1998 第1図-19
49	宮之上	山梨 甲州市	C2③		今福2000 第5図-4
50	梨久保	長野 岡谷市	C2③	* 五式期前半	今福1998 第1図-14
51	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2③		今福2000 第7図-3
52	宮之上	山梨 甲州市	C2④	貉沢式古	今福1998 第5図-2
53	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2④	貉沢式期	今福1998 第6図-2
54	棚畑	長野 茅野市	C2④	貉沢式期	今福1998 第6図-6
55	鋳物師屋	山梨 南ア市	C2④	* 五 II c式～貉沢式古	今福1998 第6図-16
56	宇津木台	東京 八王子市	C2④	* 五 II 式新～貉沢式期	今福2000 第10図-2
57	平出	長野 塩尻市	C2④		今福2000 第9図-1
58	釈迦堂	山梨 笛吹市	C2④	五 II b式期	今福1998 第6図-8
59	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1①	貉沢式期	今福1998 第6図-4
60	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1①	貉沢式期	今福1998 第6図-7
61	棚畑	長野 茅野市	D1①	貉沢式期	今福1998 第6図-10
62	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1①	貉沢式期	今福1998 第6図-5
63	棚畑	長野 茅野市	D1①	貉沢式期	今福1998 第6図-15
64	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1①	新道式期	今福1998 第7図-2
65	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1①	新道式期	今福1998 第7図-3
66	中丸	山梨 笛吹市	D1①	新道式期	今福1998 第7図-12
67	俎原	長野 塩尻市	D1①	新道式期	今福1998 第7図-5
68	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1①	藤内式期	今福1998 第9図-14
69	鋳物師屋	山梨 南ア市	D1①	藤内式期	今福1998 第8図-21
70	中溝	山梨 都留市	D1①	藤内式期	今福1998 第8図-14
71	梨久保	長野 岡谷市	D1①	藤内式期	今福1998 第9図-6
72	中溝	山梨 都留市	D1①	藤内式期	今福1998 第8図-18
73	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1①	藤内式期	今福1998 第8図-22
74	鋳物師屋	山梨 南ア市	D1①	新道式～藤内式期	今福1998 第8図-7
75	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1①	藤内式期	今福1998 第9図-3
76	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1①	藤内式期	今福1998 第9図-7
77	藤内	長野 富士見町	D1②	藤内式期	今福1998 第9図-1
78	俎原	長野 塩尻市	D1②	藤内式期	今福1998 第9図-2
79	一の沢西	山梨 笛吹市	D1②	井戸尻Ⅲ式期	今福1998 第10図-1
80	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1③	井戸尻式期	今福1998 第10図-9
81	釈迦堂	山梨 笛吹市	D1③	井戸尻式期	今福1998 第10図-2
82	一の沢西	山梨 笛吹市	D1③	井戸尻式期	今福1998 第10図-5
83	宮之上	山梨 甲州市	D2①	貉沢式期	今福1998 第5図-4
84	坂井	山梨 韮崎市	D2②	新道式期	今福1998 第7図-1
85	熊久保	長野 朝日村	D2②	藤内式期	今福1998 第9図-4
86	釈迦堂	山梨 笛吹市	D2②	藤内式期	今福1998 第9図-5
87	殿村	長野 下諏訪町	D2②	井戸尻式期	今福1998 第10図-3
88	釈迦堂	山梨 笛吹市	D2③	井戸尻式期	今福1998 第10図-6
89	釈迦堂	山梨 笛吹市	D2③	井戸尻式期	今福1998 第10図-7
90	梨久保	長野 岡谷市	D2③	井戸尻式期	今福1998 第10図-4
91	尖石	長野 茅野市	D2③	井戸尻式期	今福1998 第10図-8

凡例：あ市＝あさる野市、南ア市＝南アルプス市、五＝五領ヶ台、古＝古段階、中＝中段階、新＝新段階、*＝今福2000で改めて伴土器から時期比定が行われているもの。

ているか／否かである。また、もし継承されているならば、それがどのように展開したのかも併せて重要な問いになるだろう。これらの論点の検討をとおして、以下で認識の更新と深化を目指したい。

2. 本論

(1) 対象資料と資料の大別

本稿の論点を検討する上で有効な地域は中部高地（長野県・山梨県）である。そこで本稿では、この地域における縄文時代前期中葉～縄文時代期中葉を中心に検討する。

なるべくシンプルに論を進めるため、本稿では土偶の頭部を中心に扱う。それでも資料数は膨大になるので、1990年代の終わりに今福利恵氏と榎原功一氏が検討した資料にほぼ限ってまずは扱うこととし、資料の時期や特徴に関する把握においても両氏の広範で緻密な成果を参考にする（今福 1998・2000、榎原 1998）。資料の出土地、時期、本稿での類型等については表1にまとめた。表1の資料番号と以下の本文・挿図の番号は共通する。

検討に際し、まず対象資料を類型化する。前章で整理したように依代としての重要要素である〈うつろ〉表現に注目した時、縄文時代前期に帰属する資料はA類とB類に、中期に帰属する資料はC類・D類に大別できる。以下、その類型と内容について述べる。

(2) 類型とその内容

A. A類

前期に帰属する板状土偶のうち、穴や孔、凹み、空白などにより頭部前面に〈うつろ〉を表現したもの。いずれも顔面はない。A 1類とA 2類が見出せる。

【A 1類：図5- 1・2】 頭部前面を空白にすることで空虚な〈うつろ〉を表現したもの。時期的には前期中葉のものだが、〈うつろ〉表現のあり方としては、縄文時代草創期の例（図1- 5）から継承されてきたものである（瀬口 2015）。頭部資料ではないが参考資料として図5- 3～9がある。このうち3・4は胴部、5は胴部上半、6・8は胴部下半～脚部、9は脚部である。

【A 2類：図5-10～13】 連続する刺突孔によって頭部前面を縁取ることで、その内側に空虚な〈うつろ〉を表現したもの。このうち、10・11は頭部と胴部の間にくびれがあるが、13においてその区分は明確ではない。時期的には前期中葉（10）、前期後葉（11～13）のものである。

B. B類

前面だけでなく、頭部上面に〈うつろ〉表現が見出せるもの。作業仮説上のものも含めてB 1類とB 2類がある。

【B 1類：図5-14】 桂野遺跡から実際に出土した資料が相当する。時期的には縄文時代前期末葉十三菩提式期のもの、A 2類の図5-13と同様に頭部と胴部の間にくびれがない。粒状に連ねた粘土帯によって頭部上面を縁取る

ことで、その内側に空虚な〈うつろ〉を表現したものである。本資料は、初期土偶一般に通じる板状のものでありながら、河童形土偶にも通じる皿状の頭部上面を作り出しているものであり、その意味をいち早く捉えた原田昌幸氏や市川恵子氏らにより、中期土偶への移行を考える上で重要な資料として注目されてきた（原田 1998、市川 1999 ほか）。以下、筆者の位置づけを述べる。

本資料には刮目すべき2つの特徴が見出せる。特徴1は粒状に連ねた粘土帯によって頭部上面を縁取る点であり、特徴2は頭部前面の上端を後方へ屈折させている点である。いずれもA2類（10～13）からの繋がりや、次の段階への展開を認識していく上で重要だ。

まず特徴1を理解するために、参考資料の14bとA2類の10～13を比較したい。14bは14の頭部上面を切り離し、同じ14の頭部前面の上端に貼りつけ直した合成図である。この合成図のような資料が実際に出土した場合、私たちはA2類からB1類への型式学的なつながりを極めてスムーズに理解するだろう。前段階のA2類の10～13の特徴は、連続する〈ネガティブな刺突孔〉によって頭部前面を縁取るところにある。対してB1類から起こした合成図14bは、連続する〈ポジティブな粘土粒〉で縁取るものである。この点に着目できれば、14bはA2類と同じく頭部の縁辺を円形状のもので縁取るものであり、A2類の特徴をネガからポジに反転置換したものだと言えよう。このように整理すれば、両者の型式学的なつながりはスムーズに理解できるはずだ。

次に特徴2を理解するために、14bとB1類の14を比較する。繰り返すが、14bは14の頭部上面を切り離し、同じ14の頭部前面の上端に貼りつけ直した合成図である。この合成作業が示すように、14とは、14bの頭部前面の上端を後方に屈折させたものに他ならず、14の頭部上面とは、連続する〈ポジティブな粘土粒〉で縁取られた〈うつろ〉な空間として認識できる。

後述するように、以上の展開は、初期土偶の段階から中期土偶の段階への展開を具体的に描く上で重要だ。というのも、このプロセスが起きたことにより、〈うつろ〉表現を頭部前面にだけ配置していた段階から、頭部上面にも配置する段階へと転換したからである。この点を認識するなら、14の存在意義はやはり大きいものだといえるだろう。

【B2類：図5-15～17】 中期土偶の類型群に対する理解をスムーズにしていくなため、B1類の14をベースに作成した作業仮説上のバリエーションである（以下、作業仮説類型とする）。実在するB1類は、粒状に連ねた粘土帯によって頭部上面を縁取ることで、空虚な〈うつろ〉を表現するものだが、B2類は、板状の粘土帯によって頭部上面を縁取ることで、〈うつろ〉を表現する点で異なる。頭部上面のあり方から①～③に細分する。①は板状の粘土帯の縁取りによって生じた凹みや囲みを頭部上面に残すこと

で、〈うつろ〉を表現するものである（15）。②は縁取りの痕跡を消去し、空白なスペースを設けることで〈うつろ〉を表現するもの（16）、③は上記②とおなじ調整を加えたのち、連続する刺突孔によって頭部上面を縁取ることで、〈うつろ〉を表現したもの（17）である。

これらの作業仮説類型はいずれもまだ出土事例がない。しかし後で触れるように、中期土偶の出土例にも目を配るなら、その祖型として実在していた可能性は十分に想定できる。今後の調査での実際の出土が期待される。

C. C類

粘土帯によって頭部上面を縁取ることなどにより、円盤形や逆台形状の頭部を成形するもので、その上面に〈うつろ〉表現が見出せるもの。C1類とC2類があり、C1類は①・②に弁別でき、C2類は①～④に弁別できる。

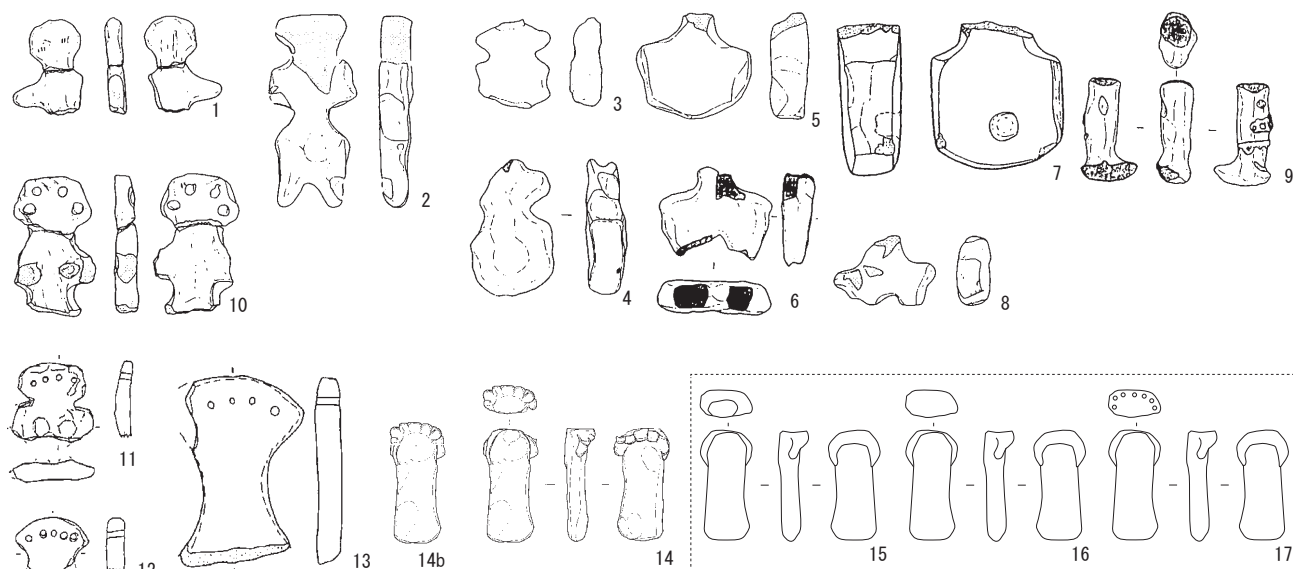
【C1類①：図5-18～22】 C類のうち、前期B2類①（図5-15）と同様に、粘土帯の縁取りによって生じた凹みや囲みを頭部上面に残すことで、〈うつろ〉が表現されているもの。五領ヶ台I式古段階のもの（18）、同新段階のもの（20・21）、同II式古段階までのもの（22）がある。

18・19・21は頭部上面に凹みが残る。18は顔面表現が明確でないもので、五領ヶ台I式期の古い段階の土器に共伴した（今福 2000）。19～22は頭部前面に顔面を配し、その輪郭も粘土紐で縁取る。20・21は形態的に類似する。

【C1類②：図5-23～28】 C1類①の粘土帯の縁取りによって生じた凹みや囲みを環状文系文様に置換し、〈うつろ〉が表現されているもの。時期的には五領ヶ台II式期（23・24・27）～猪沢式期（26）のものがある。ここでいう環状文系文様とは円形を描く環状文を指し、U字形文、渦巻螺旋文などをそのバリエーションとする（3）。このうち環状文はその円環の内側に〈うつろ〉を表現しているもので、U字形文はその円環の一部が途切れたものである。なお、渦巻螺旋文（以下渦巻文と略す）は環状文に求心性をもたせたもので、S字状文や蛇行状の文様はそれを側面から表現したものに位置づけられる。

24は頭部上面に連続的な刺突によって「頭髪のような表現」（今福 1998, P118 ほか）を配したのち、渦巻文をその中心に加える。25の頭部は円盤状で、その頭部上面に沈線による環状文を施し、26は頭部上面に隆線による渦巻文を加える。27の頭部は薄く平坦で、その頭部上面に入り組んだ渦巻文を沈線で加える。26・27の顔面は輪郭をもたず、横長の目だけを表現する。28は後頭部がやや後方に張り出すもので、頭部上面に渦巻螺旋状の文様を施す。

【C2類①：図6-29～36】 前期B2類②（図5-16）と同様に、頭部上面の縁取りの痕跡を消去し、空白なスペースを設けることで〈うつろ〉が表現されたもの。時期的には五領ヶ台II式期～猪沢式期を中心とし、新保・新崎式期（29）やII式期古段階（30）のものを含む。



(1) 前期A 1類、A 2類、B 1類、B 2類ならびに参考資料（3～9・14b）

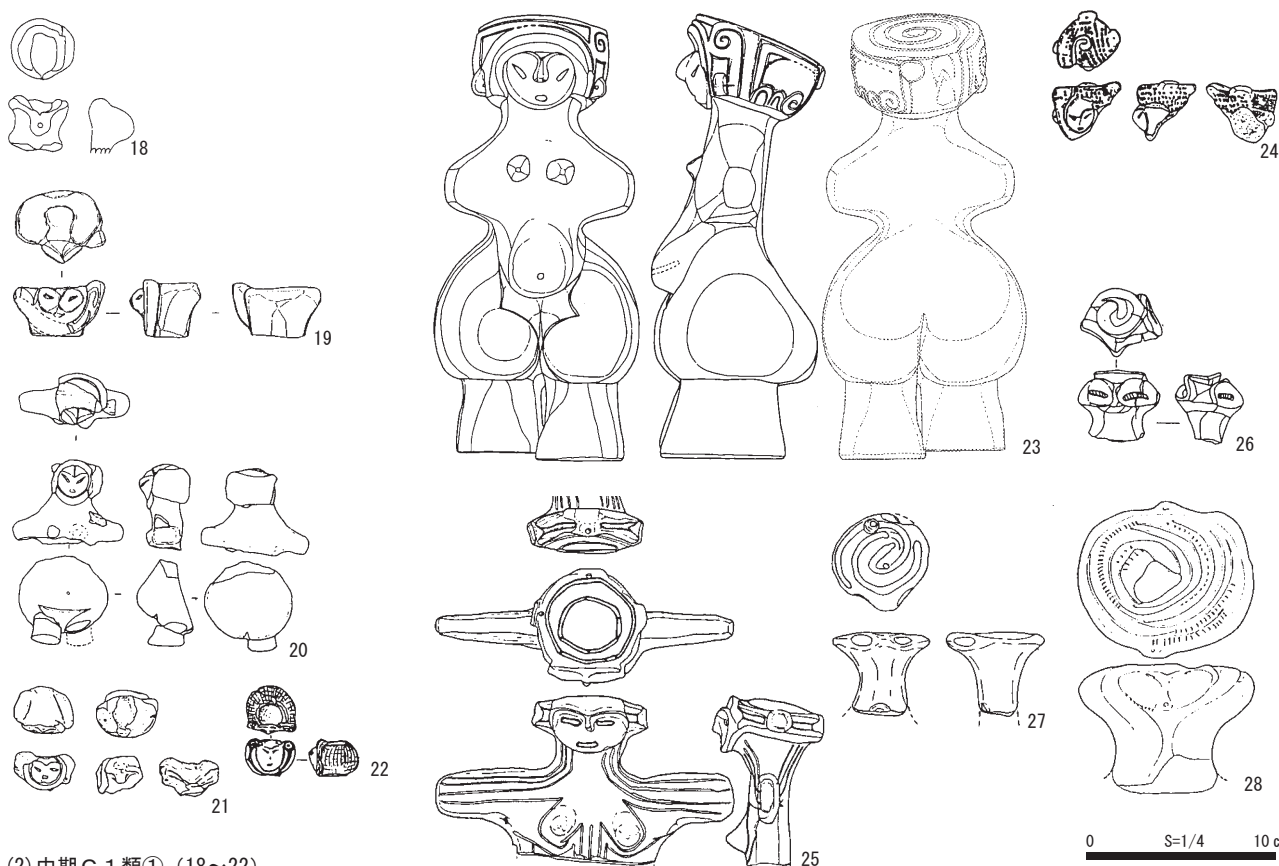
A 1類（1・2） 頭部前面を空白にすることで空虚な〈うつろ〉が表現されたもの。

A 2類（10～13） 連続する刺突孔によって頭部前面を縁取ること、その内側に空虚な〈うつろ〉が表現されたもの。

B 1類（14） 粒状に連ねた粘土帯によって頭部上面を縁取ること、その内側に空虚な〈うつろ〉が表現されたもの。

B 2類（15～17） 実在するB 1類（14）をもとに設定した作業仮説上のバリエーション

0 S=1/4 10 cm



(2) 中期C 1類①（18～22）

粘土帯によって頭部上面を縁取ることなどにより、円盤型や逆台形状の頭部を成形し、その上面に〈うつろ〉が表現されたもの。

(3) 中期C 1類②（23～28）

C 1類①の粘土帯の縁取りによって生じた凹みや囲みを環状文系文様に置換し、〈うつろ〉が表現されたもの。

図5 前期A類・B類ならびに中期C 1類

29は頭部に粘土紐を巻きつけ、やや外に広がる頭部上面を作り出す。顔面表現はない。30は頭部を断面T字形に成形し、頭部上面を平滑に整える。目と口は沈線で表すが、明確な顔面の輪郭はもたない。31もやや外に広がる頭部を成形し、その上面を扁平にする。目と口を刻みで表現する。32は頭部上面を扁平に成形する。34の頭部は円盤状で、前面を切り取り、ハート形の顔面を貼付する。

【C 2類②：図6-37～47】 前期B 2③（図5-17）に類似した頭部上面をもつもので、上記C 2類①の頭部上面の縁辺に刺突孔を配することで〈うつろ〉が表現されたもの。五領ヶ台I式古段階～貉沢式期を中心とする。

37は五領ヶ台I式の古い段階の土器と共存する。頭部前面は板状で、その背面側と上面に粘土板を貼りつけ、中空の頭部を作り出し、頭部上面を「河童形」に成形する。頭部前面の形状は横長逆台形で、粘土紐と刺突により顔面を表現する。頭部上面に垂直方向の刺突孔がめぐる。櫛原氏や今福氏は、この刺突孔を前期大曲輪タイプからの変化と指摘した（櫛原1998, P70、今福1998, P119）。前期大曲輪タイプの場合は、前面から穿たれた水平方向の刺突である（図5-10～13）。かたや37の場合は上面から穿たれた垂直方向の刺突であり、その点において相違するが、頭部の縁辺を巡るという点で共通しており、B 1類の特徴2で述べたように、〈頭部上面〉＝〈頭部前面を後方へ屈折させた面〉と理解するなら、両氏の指摘と整合的になる。

38は頭部上面をやや凹ませて河童形に成形する。頭部上面の背面（後頭部）近くに垂直方向の刺突孔が2つ並ぶ。頭部前面には横長の顔面を設け、粘土を突出させて眉を表現し、刺突により目と口を明確に表す。39は頭部上面を平坦に整え、目と口を刻みで表現する。40は頭部の背面側を張り出し、上面を凹ませ、背面近くに垂直方向の刺突孔を1つ設ける。43は円盤状の頭部をもち、頭部前面の左右に三叉文状の抉りを表現し、その下にハート形の顔面を配する。44～47は円盤状の頭部をもち、その上面に垂直方向の刺突孔を3つ配する。47は頭部の両側面に、玉抱き三叉文状の文様を弧線で表す。

【C 2類③：図6-48～51】 上記C 2類①・②の頭部上面に、連続する刺突文（48・50・51）や刻み（49）を付加したもの。これに渦巻文を加えたものはC 1類②に含めた（図5-24）。時期的には五領ヶ台式期を中心とする。

48はハート形を呈する「仮面状顔面」（櫛原1998）を頭部前面に貼りつける。49は薄く平坦な円盤状の頭部をもち、顔面は輪郭をもち、横長の目だけを表現する。50の頭部は円盤状で、前面の顔面は横長を呈する。51は頭部前面にハート形の顔面を突き出るように取りつける。

【C 2類④：図6-52～58】 C 2類①～③の頭部背面に環状文系文様を付加することで、〈うつろ〉が重層的に表現されたもの。五領ヶ台II式期～貉沢式期を中心とする。

このうち、52は円盤状の頭部背面にU字形文を加える。

53の頭部は粘土紐を巻いて成形する。頭部背面に環状文の痕跡が残る。55の頭部は粘土紐を巻いて滑車状の円盤形に成形している。頭部の前面と背面に環状文を付し、前面にハート形の顔面を配する。56の頭部は円盤状で、上面から見た形状は半円形を呈する。頭部上面の背面側に垂直方向の刺突穴を加える。また、頭部背面に環状文を、側頭部には抉りを配し、両者の組み合わせにより玉抱き三叉文状の文様（今福1998）を表現している。57は薄い円盤状の頭部をもち、頭部の厚さより大きい横長楕円形の板状の顔面をその前面に取りつける。

D. D類

環状文系文様を配することで、頭部背面に〈うつろ〉が表現されたもの。最大の特徴は、C類でいうところの頭部上面が後方へ屈折して背面と化し、それに伴い〈うつろ〉表現もまた頭部背面へと転移している点である。D 1類とD 2類のバリエーションがある。D 1類は頭部背面が1面構成のものであり、D 2類は左右2面で構成されるものである。それぞれは①～③に弁別できる。

【D 1類①：図7-59～76】 頭部背面の中央付近に、環状文ないし渦巻文、あるいはそれと三角形文を組み合わせた玉抱三叉文を配することで、〈うつろ〉が表現されたもの。時期的には貉沢式期（59～63）、新道式期（64～67）、藤内式期（68～76）のものがある。

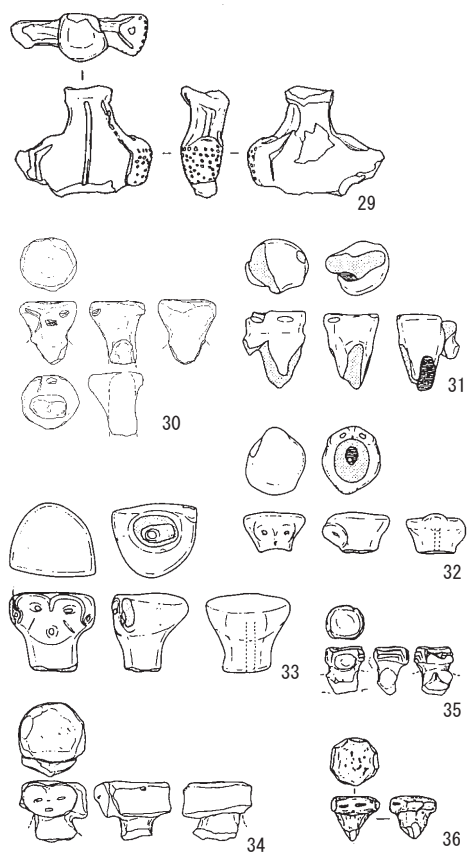
59は頭部前面に角押文で目と口を描く。両側頭部には三角形文をあしらい、その中央にあたる背面には環状文を配する。62は球形に近い頭部をもち、頭部の側面に三角形文をあしらい、背面には環状文を配する。頭部前面に角押文で目と口を描く。63は頭部の背面に玉抱三叉文を配する。64・66は頭部の側面に三角形文をあしらい、頭部背面に環状文を隆線で表し、環状文の中心にはさらに穴を設ける。69の頭部背面は欠損により判断しづらいが、66と同様に隆帯により環状文を配していたと推定できる。胴部と頭部は空洞になるように成形されている。71・75は頭部背面に隆線で環状文を加える。74は頭部背面へ環状文にかわって渦巻文を配する。

【D 1類②：図8-77～79】 D 1類①の環状文や渦巻文を蛇体状の文様に置換し、〈うつろ〉が表現されたもの。藤内式期（77・78）、井戸尻式期（79）のものがある。

77・78は頭部背面に隆線による蛇体状の渦巻文を配し、隆線上に刻みを加える。77の頭部前面には板状（仮面状）の顔面が貼りつけられている。79は頭部全体を球形に膨らんだ中空構造に成形し、頭部背面に隆線による蛇体状の渦巻文を配する。

【D 1類③：図8-80～82】 上記D 1類②の蛇体状の渦巻文の上部に下記D 2類②の双環状意匠を付加することで、〈うつろ〉が重層的に表現されたもの。時期的にはいずれも井戸尻式期のものである。

【D 2類①：図8-83】 左右に配された環状文と渦巻文



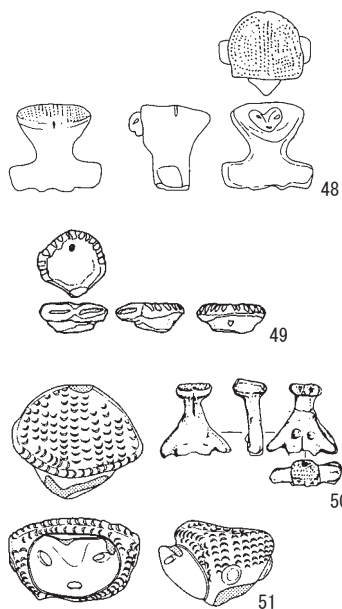
(1) 中期C2類① (29~36)

頭部上面の縁取りの痕跡を消去し、空白なスペースを設けることで「うつろ」が表現されたもの。



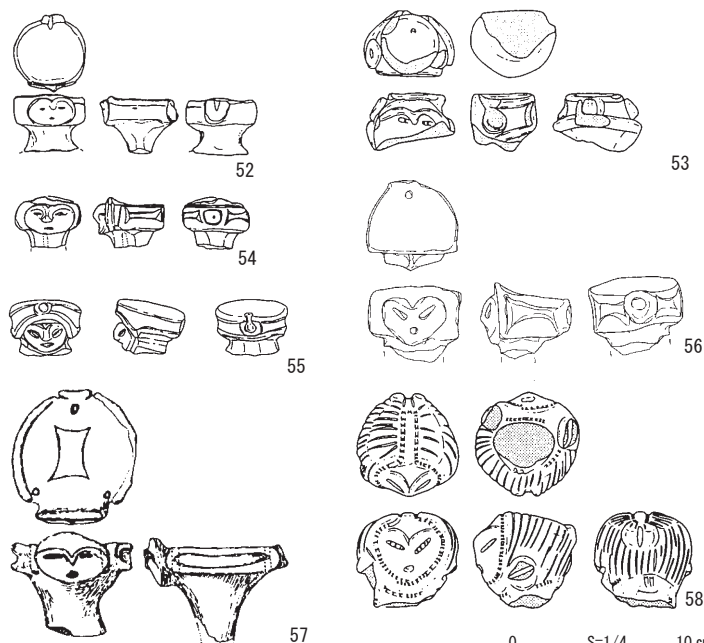
(2) 中期C2類② (37~47)

C2類①の頭部上面の縁辺に刺突孔を配することで「うつろ」が表現されたもの。



(3) 中期C2類③ (48~51)

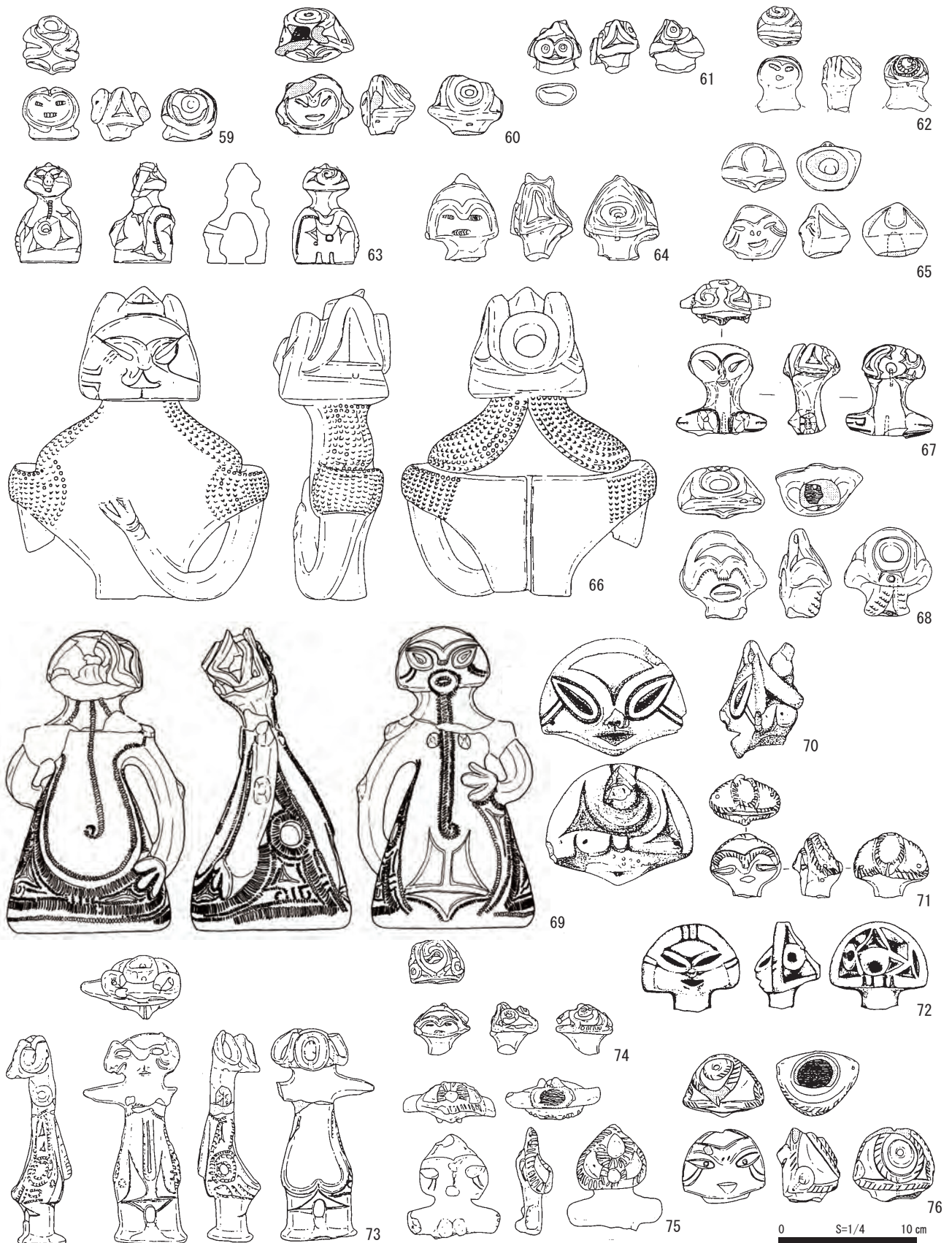
C2類①・②の頭部上面に連続する刺突文や刻みを付加したもの。



(4) 中期C2類④ (52~58)

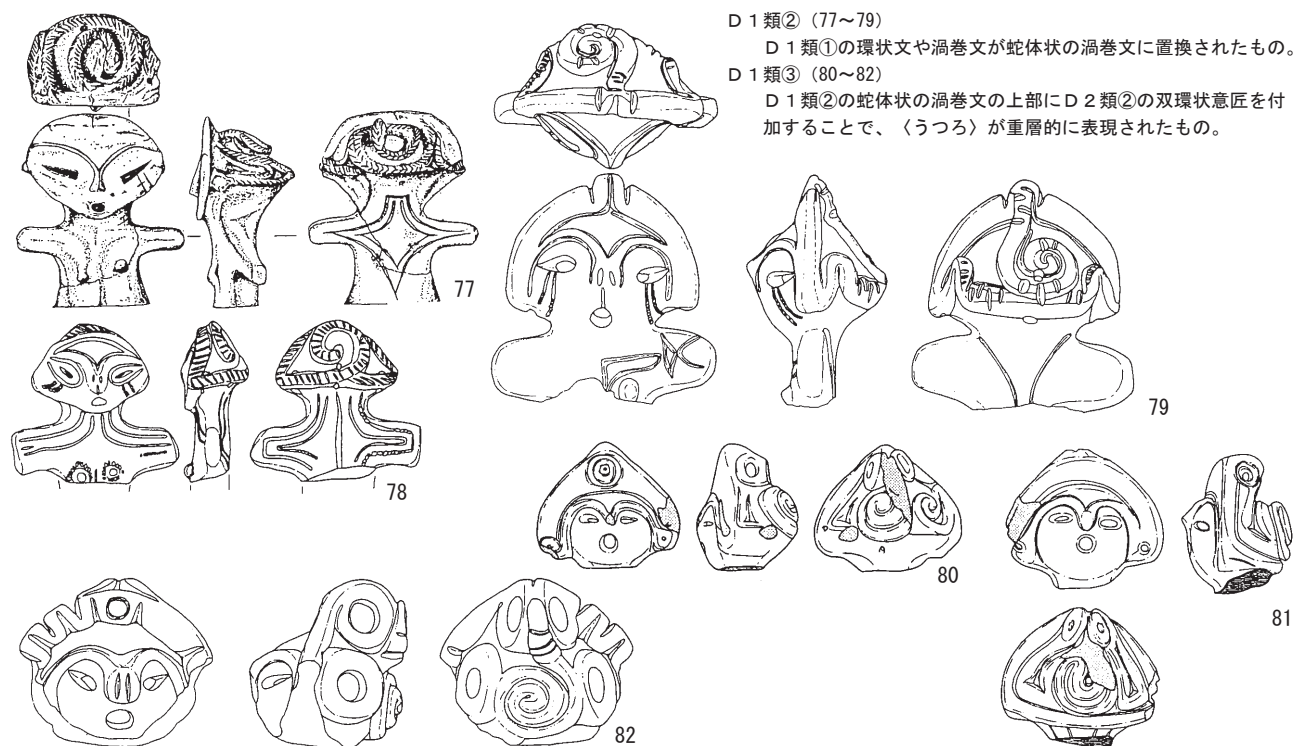
C2類①~③の頭部背面に環状文系文様を付加することで、「うつろ」が重層的に表現されたもの。

図6 中期C2類



頭部背面の中央付近に、環状ないし渦巻文、あるいはそれと三角形文を組み合わせた玉抱三叉文を配することで、〈うつろ〉が表現されたもの。

図7 中期D1類①



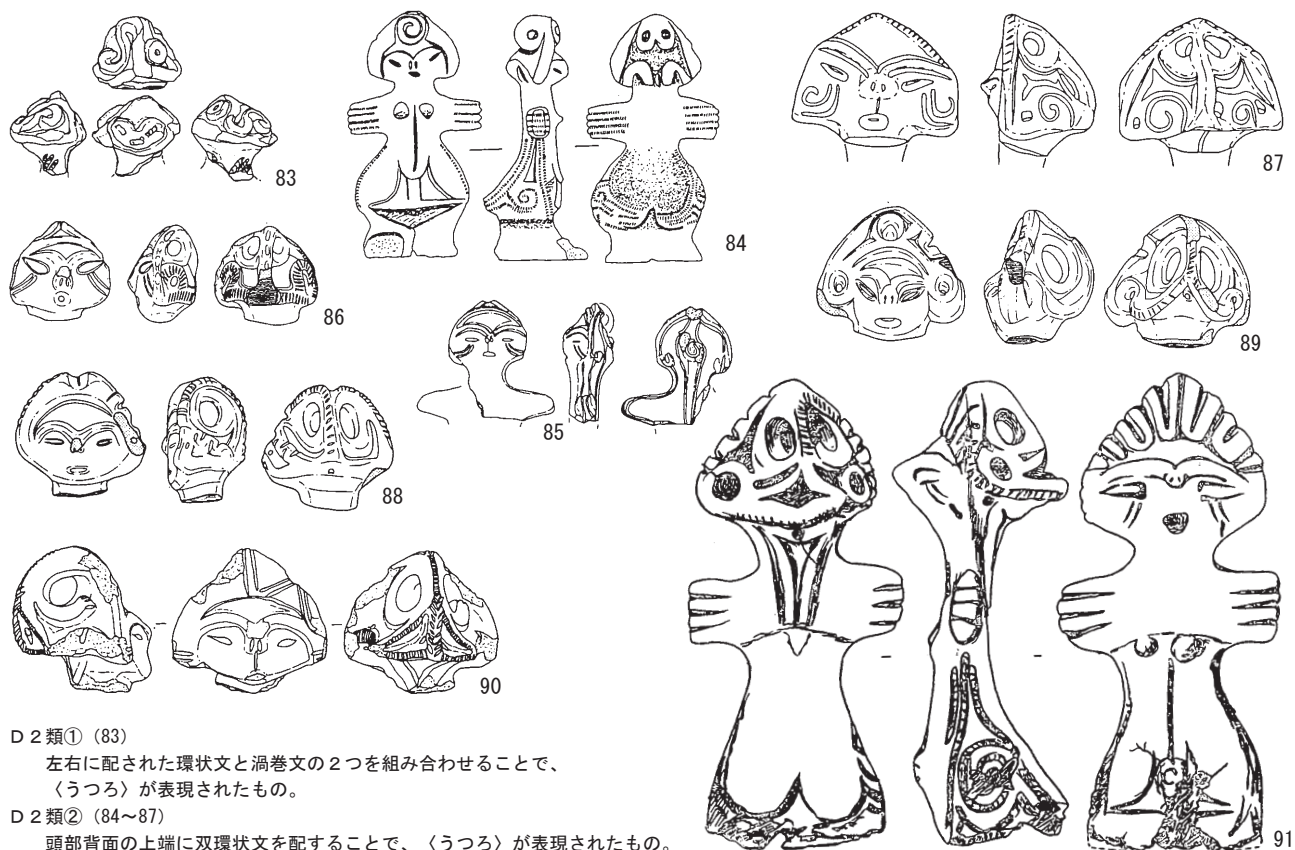
D 1 類② (77~79)

D 1 類①の環状文や渦巻文が蛇体状の渦巻文に置換されたもの。

D 1 類③ (80~82)

D 1 類②の蛇体状の渦巻文の上部にD 2 類②の双環状意匠を付加することで、〈うつろ〉が重層的に表現されたもの。

(1) 中期D 1 類②・D 1 類③



D 2 類① (83)

左右に配された環状文と渦巻文の2つを組み合わせることで、〈うつろ〉が表現されたもの。

D 2 類② (84~87)

頭部背面の上端に双環状文を配することで、〈うつろ〉が表現されたもの。

D 2 類③ (88~91)

頭部背面全体に双環状文を配することで、〈うつろ〉が表現されたもの。

(2) 中期D 2 類①~③

0 S=1/4 10 cm

図8 中期D 1 類②・③ならびにD 2 類

の2つを組み合わせることで、〈うつろ〉が表現されたもの。83の渦巻文はS字状を呈する。貉沢式期のものである。

【D 2類②：図8-84～87】 頭部背面の上端に双環状文を配することで、〈うつろ〉が表現されたもの。

ここでいう双環状文とは、左右に配された2つの環状文を組み合わせた文様で、たとえば「眼鏡状突起」などと呼ばれるものである。次のD 2類③とは、双環状文が小ぶりな点で弁別される。時期的には新道式期(84)、藤内式期(85・86)、井戸尻式期(87)のものがある。

【D 2類③：図8-88～91】 頭部背面全体に双環状文を配することで、〈うつろ〉が表現されたもの。双環状文の大きさが頭部背面全体を覆うほど大ぶりな点でD 2類②と弁別される。時期的にはいずれも井戸尻式期のものである。

(3) 段階の設定と類型の展開

A. 段階の設定

以上の類型の帰属時期の傾向は表2のとおりで、類型が顕在化する時期から見て6段階が設定できる。すなわち、A類が造形されていた段階1、B類が顕在化した段階2、C類が出現・展開した段階3、D類が付加された段階4、D類のバリエーションがさらに展開した段階5・6である。

以上の時期的推移の中で、類型間の共通点と相違点を整理し直すと、図9のような展開が見出せる。以下、段階の内容と類型の展開について述べる。

B. 段階1・2

段階1はA 1類(1)・A 2類(10・13)が造形されていた段階で、縄文時代前期中葉・後葉が相当する。頭部前面に〈うつろ〉表現が配置されている段階である。

段階2はB 1類(14)が顕在化した段階で、縄文時代前期末葉が相当する。B 1類は、頭部前面の上端を後方へ屈折させ、粒状に連ねた粘土帯によって頭部上面を縁取ることで、〈うつろ〉が表現されたものだった。すなわち段階2とは、頭部前面にあった〈うつろ〉表現が頭部上面にも付加され始めた段階である。

C. 段階3

C 1類①・②、C 2類①～④が顕在化した段階で、五領ヶ台I式～II式期が相当する。段階2に引き続き、頭部上面に〈うつろ〉が表現される段階である。その後半期には環状文系文様による表現への置換が進んだ。

C 1類①(18)は、B 1類の頭部側面を縁取る粒状の粘土帯が板状の粘土帯に置換されたもので、B 1類の後継類型に位置づけられる。C 1類②(23)は、C 1類①の粘土帯による〈うつろ〉表現が環状文系文様に置換されたもので、C 1類①の後継類型に位置づけられる。

C 2類①(30)は、C 1類①の頭部上面が空白なスペースに置換されたものであり、C 2類②(37・38)はその頭部上面の縁辺に刺突孔が設けられたものである。C 1類①の頭部上面は、作業仮説類型としてのB 2類①(15)に共

通・相似し、C 2類②のそれはB 2類③(17)に共通・相似する。このことから、作業仮説類型であるB 2類に相当するものがまず段階2に派生し、段階3の諸類型へと展開した可能性も想定される。

C 2類③(48)は、C 2類②の刺突孔が面的ないし列状に充填されたもの、C 2類④(56)は、C 2類②の頭部背面に環状文が付されたもので、いずれもC 2類②からの派生類型に位置づけられよう。なおC 2類は、段階4に繋がる類型を派生させずに終息した。かたやC 1類はD 1類へと派生し、段階4へ展開している。

D. 段階4

D 1類①(59・62・64)、D 2類②(83)が顕在化した段階で、貉沢式期が相当する。両類型は環状文系文様を採用しており、C 1類②から派生したと考えられる(4)。

注目すべきポイントは、〈うつろ〉が表現される位置だ。段階3のC 1類②では頭部上面だが、段階4のD 1類では、そのスペースが後方に再屈折し、これに伴い〈うつろ〉が表現されるスペースも頭部背面へと転換・転移している。

また、この変化と軌を一にして〈うつろ〉の構成にも変化が生じ、1面で構成される類型と2面で構成される類型へ分化している。1面で構成されるD 1類①は、C 1類②の直接的な後継類型であり、段階5のD 1類②(77・79)へ繋がる類型だと見てよいだろう。2面構成で構成されるD 2類①は、同じくC 1類②から派生した類型であり、段階5のD 2類②(84・86)へ繋がるものだと考えられる。

E. 段階5・6

段階5は新道式・藤内式期が相当する。この段階に、環状文系文様による〈うつろ〉表現を蛇体状の渦巻文として整えたD 1類②(77・79)が顕在化した。また小ぶりな双環状文様——環状文系文様を組み合わせた2面構成の〈うつろ〉表現——をもつD 2類②(84・86)も顕在化した。

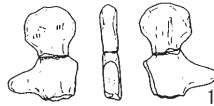
段階6は井戸尻式期が相当する。D 1類②とD 2類②の〈うつろ〉表現を複合させたD 1類③(82)が成立し、蛇体状の渦巻文と小ぶりな双環状文様を組み合わせ、より重層的に〈うつろ〉を表現するあり方への展開が生じている。また段階5では小ぶりだった双環状文様が大型化したD 2類③(89・90)が顕在化し、ここでも頭部背面における〈うつろ〉表現の充実化が見て取れる。いずれも〈うつろ〉をより目立たせる表現への変化として認識できよう。

(4) 検討結果の整理

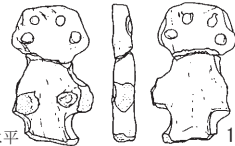
本章で検討すべき課題は、縄文時代中期以降に本格的に付加された「精霊像としての土偶」に関する認識の更新と深化だった。この課題に応じるため、依代としての重要要素である〈うつろ〉表現が「精霊像としての土偶」にも継承されているか／否か、もし継承されているならば、どのような過程なのかといった問いを論点とし、具体的な検討を試みた。検討の結果を整理すると図10のとおりとなる。

段階 1

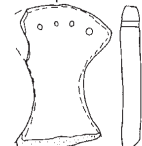
A 1 類
前期中葉
～



1



10

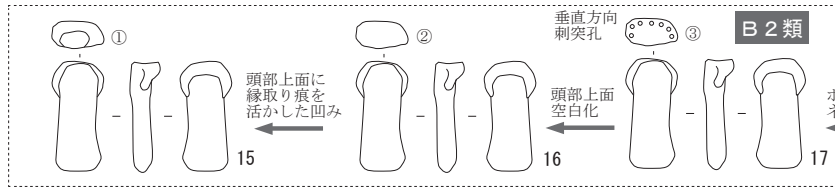


13

A 2 類
前期中葉
～

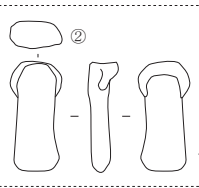
連続する
刺突孔

段階 2



①
頭部上面に
縁取り痕を
活かした凹み

15



②
頭部上面
空白化

16



③
垂直方向
刺突孔

17

ネガ/
ポジ反転
後方屈折

B 2 類

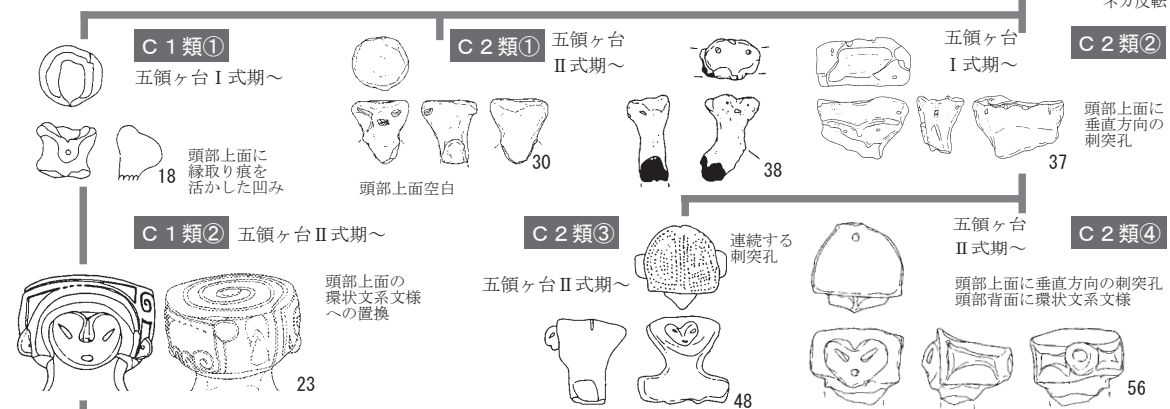
B 1 類

前期
末葉
～

14

ポジ/
ネガ反転

段階 3



C 1 類①

五領ヶ台 I 式期～

18

頭部上面に
縁取り痕を
活かした凹み

C 1 類②

五領ヶ台 II 式期～

23

頭部上面の
環状文系文様
への置換

C 2 類①

五領ヶ台 II 式期～

30

頭部上面空白

C 2 類③

五領ヶ台 II 式期～

48

連続する
刺突孔

C 2 類②

五領ヶ台 I 式期～

37

頭部上面に
垂直方向の
刺突孔

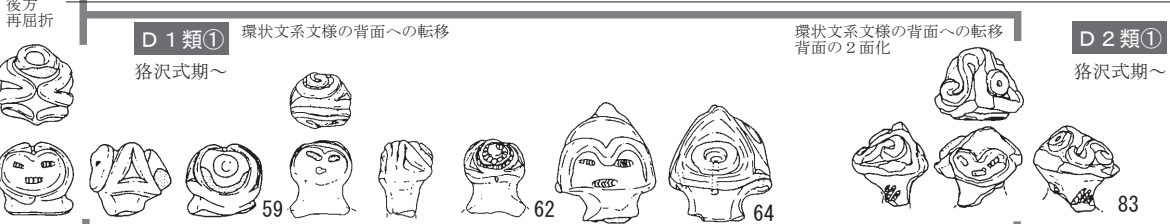
C 2 類④

五領ヶ台 II 式期～

56

頭部上面に垂直方向の刺突孔
頭部背面に環状文系文様

段階 4



D 1 類①

環状文系文様の背面への転移

59

猪沢式期～

62

64

63

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

64

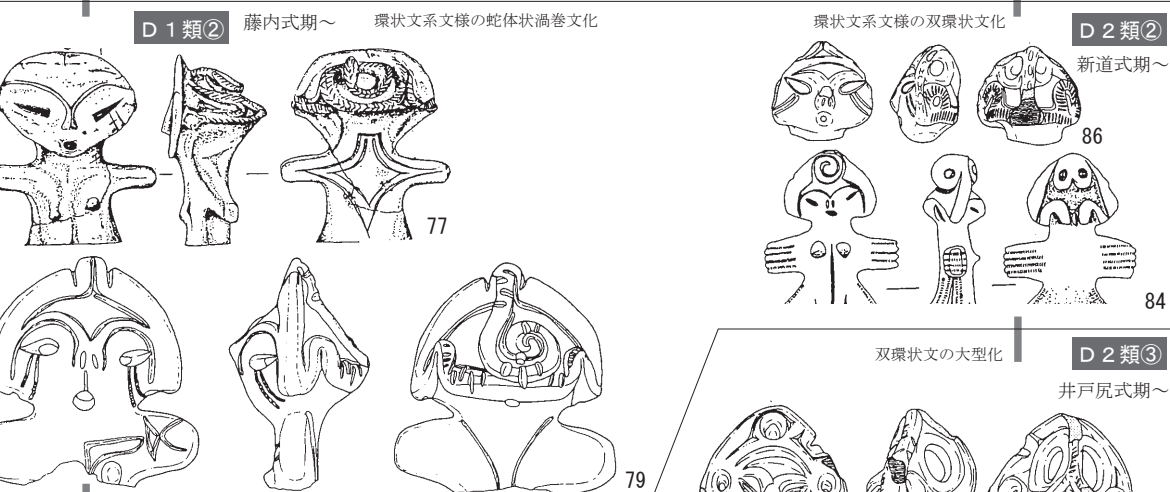
環状文系文様の背面への転移
背面の 2 面化

D 2 類①

猪沢式期～

83

段階 5



D 1 類②

藤内式期～

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

77

環状文系文様の蛇体状渦巻文化

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

79

環状文系文様の双環状文化

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

86

D 2 類②

新道式期～

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

84

双環状文の大型化

D 2 類③

井戸尻式期～

89

89

89

89

89

89

89

89

89

89

89

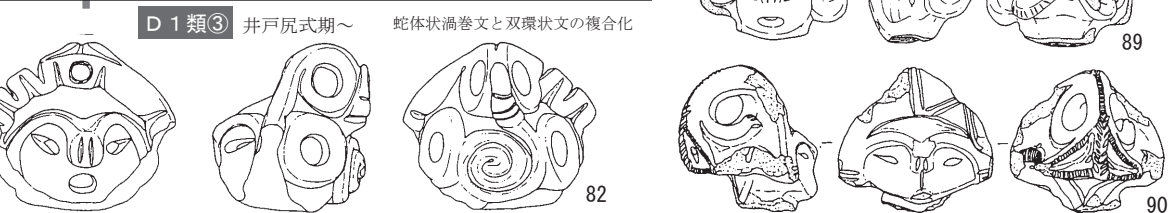
89

89

89

89

段階 6



D 1 類③

井戸尻式期～

82

82

82

82

82

82

82

82

82

82

82

蛇体状渦巻文と双環状文の複合化

82

82

82

82

82

82

82

82

82

82

82

82

89

89

89

89

89

89

89

89

89

89

89

89

89

図 9 中部高地における前期中葉から中期中葉までの展開

段階1・2は初期土偶の段階であり、段階3は中期土偶への移行期に相当する。段階1は、〈うつろ〉を頭部前面に表現する段階だが、段階2において〈うつろ〉を頭部上面に表現する形へ展開し、直後の段階3にはその頭部前面に顔のある土偶の顕在化へ移行した。まさに、この段階2から段階3への展開の中で、霊的存在が取りついた精霊像であることを頭部前面で示しつつ、霊的存在の取りつきを待つ受け皿としての〈うつろ〉を頭部上面に表現するあり方が成立したと見てよいだろう。段階1から段階3における〈うつろ〉表現の継承過程は以上のとおりである（5）。

その後の類型間の類似配列上の繋がりから、段階3の後半から段階6への展開においても〈うつろ〉表現は継承されていたと見てとれる。時期的な移ろいの中で、〈うつろ〉表現は、様々なバリエーションを派生させ、複合・置換しながら受け継がれ、配されるスペースも頭部上面から背面へと転移しつつ継承されていたと認識できる。

なお、以下についてはさらなる検討が必要だが、〈うつろ〉表現を集めたイメージ上のパレットが作り手の間で共有されていたことも推察される（図11）。段階2のパレットは図11-（1）のとおりで、段階3の後半には図11-（2）のようなものへと展開し、そして段階4～6には図11-（3）へと拡充された。作り手たちは、このパレットからパーツを取り出し、複合・置換をしながら「精霊像としての土偶」を造形していったこともまた推察される（6）。

3. 結論と展望

（1）結論

以上、精霊像としての土偶に関する認識の深化を課題とし、対象地域における初期土偶から中期土偶への展開に関する読み解きを試みた。

結果、類型間の類似配列上の繋がりから見て、依代としての重要要素である〈うつろ〉表現は「精霊像としての土偶」にも引き続き継承されていたと結論づけられる。〈うつろ〉表現は、手を変え、品を代えながら、中期土偶への移行・展開の中において継承されていたのである。その展開過程の詳細は、図10・11ならびに前章末において整理したとおりである。

以上の結論が示すように、中期に付加された「精霊像としての土偶」は、依代的要素を廃したものではなく、依代的要素も引き続き併せ持っていたものだと認識できる。焼成前の作り手の中にある段階に、顔面を取りつける／描くというプロセスによって霊的存在をその造形の中に取りつかせてはいるが、使い手が使用する段階においても霊的存在を取りつかせ得る構造は継承されていた。初期土偶の段階にはじまる「依代としての土偶」と同様に、「精霊像としての土偶」もまた、依代としての機能を内包しつつ用いられていたのである。土偶祭祀の実態と展開を読み解いていく上で、意義ある認識の更新と深化ができたと考える。

（2）課題と展望

努力不足に起因する多くの課題については、引き続き対応していきたい。特に対象地域の資料や関連研究の蓄積の咀嚼はまだ大きく不足している。諸賢のご教示とご指導をどうか賜りたい（7）。そのほか、今後の展望に繋がる課題を3つ挙げておく。

課題1は背景に関する課題である。本稿では、〈甲〉が取りつくための受け皿としての〈うつろ〉表現に着目し、（1）それが頭部前面に配置される段階1、（2）配置面が後方に屈折し、頭部上面も配置面として付加された段階2・3、（3）頭部上面から頭部背面にさらに移行した段階4～6を見出した。しかし、この展開の方向性を生み出した背景については確かな見解を持っていない。例えば、土偶の背面観が重要となる土偶装飾付土器の定型化（瀬口2020）等に関連する可能性もあるが、その妥当性の検討も含めて今後の課題にしたい。

課題2は地域的な展開に関する課題である。上記（1）から（3）への展開が、中部高地だけでみられる現象なのか、東北地方や北陸地方などでも見られるのか、見られるとするなら、どのような相違と共通がそこで見いだせるのかといった点も、土偶祭祀の実態と展開を読み解いていく上で重要な論点になる。その検討を課題2としたい。

課題3は土器との関係である。前稿（瀬口2022）で示したように、東北地方の円筒上層式土器では土器波頂部／突起部にしばしば土偶意匠を配置している。その意匠は初期土偶でいうところの〈乙〉を継承するもので、土器の波頂部や突起部に〈甲〉が取りつくための〈うつろ〉として表現されたものであった。一方、本稿で見出したパレット（図11）にみられる様々な〈うつろ〉表現もまた、縄文時代の各地の土器の波頂部や突起部等にしばしばあしらわれている。そういった場合の〈うつろ〉表現が配置された土器の意味や役割はいかなるものなのか。この点を問い直すことは重要な論点になるだろう。特に〈うつろ〉表現を持つ土器のあり方から、土偶の造形されない時期・地域を評価し直していくことは重要課題となる。さらに施文原体として利用されていた縄文や巻貝もまた渦巻螺旋そのもの——〈うつろ〉表現に関わるものと考えらるなら、検討の対象は広がり、検討の意義もより深くなるだろう。〈うつろ〉表現をととした土偶や土器の検討は、縄文人の世界観や思惟に関する認識をさらに更新・深化させてくれると考える。それらの検討も、今後の課題にしていきたい。

註

- （1）この議論に直接関連するものではないが、近年では岩崎孝次氏による時期的変遷等に関する研究がある（岩崎2021）。
- （2）本稿では概念的な一体化を想定しているが、実際に一体化が想定された例としては千葉県金堀遺跡等の事例がある（篠原1986）。

表2 各類型の帰属時期の傾向

凡例：●：出土例がある場合 ○：出土は確認されていないが想定される場合

時期	A 1 類	A 2 類	B 1 類	B 2 類	C 1 類		C 2 類				D 1 類			D 2 類			図9・10との対応
					①	②	①	②	③	④	①	②	③	①	②	③	
前期中葉	●	●															段階1
前期後葉		●															
前期末葉			●	○													段階2
五領ヶ台Ⅰ式期					●		○	●									
五領ヶ台Ⅱ式期					●	●	●	●	●	●							段階3
貉沢式期						●	●	●		●	●			●			
新道式期											●				●		段階4
藤内式期											●	●			●		
井戸尻式期												●	●		●	●	段階6

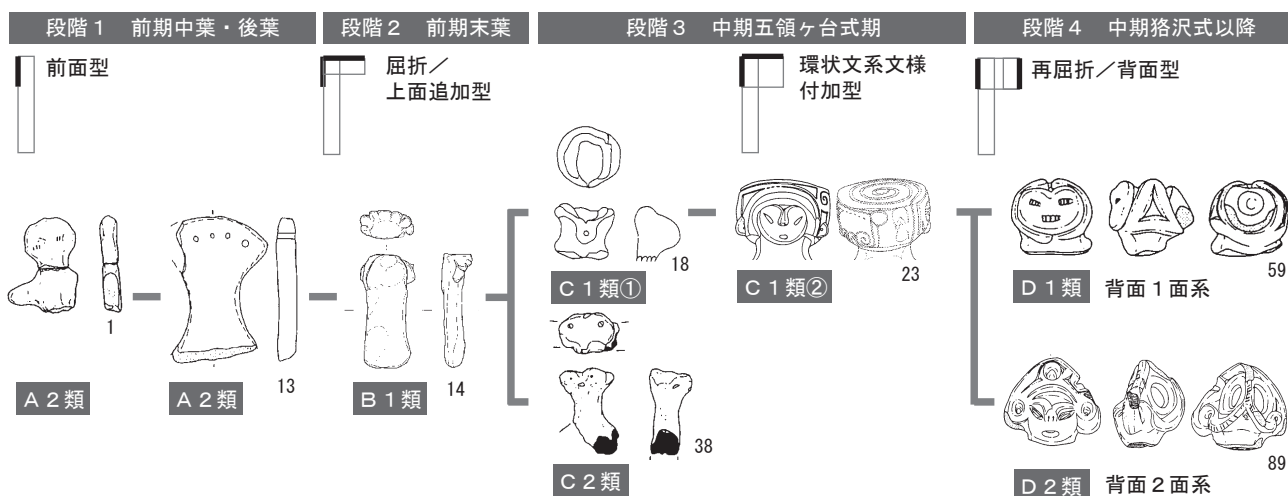
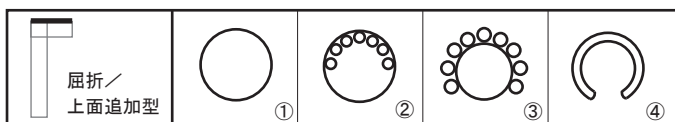
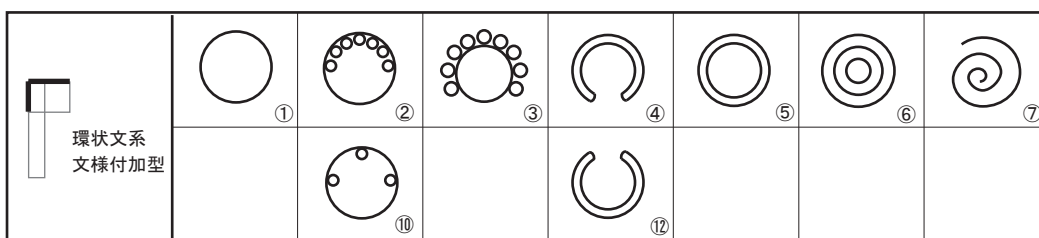


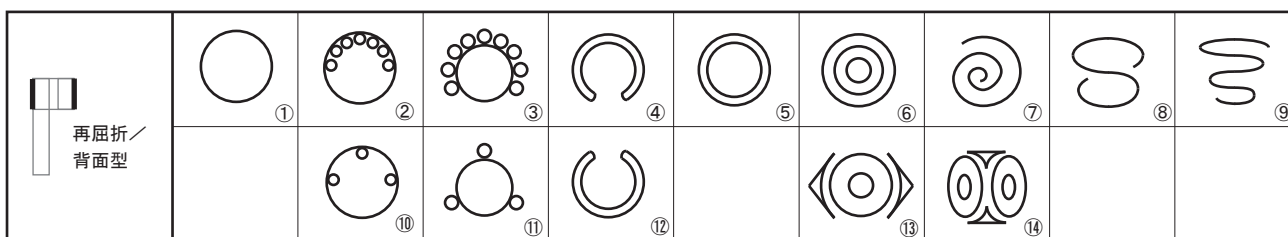
図10 〈うつろ〉表現の継承と展開



(1) 段階2におけるパレット／相互に補完性と互換性をもつ〈うつろ〉表現のバリエーション①～④



(2) 段階3におけるパレット／相互に補完性と互換性をもつ〈うつろ〉表現のバリエーション①～⑦・⑩・⑫



(3) 段階4～6におけるパレット／相互に補完性と互換性をもつ〈うつろ〉表現のバリエーション①～⑭

図11 〈うつろ〉表現のパレットとその展開

- (3) 図 11- (3) で示すならば、環状文は⑤・⑥など、U 字形文は④・⑫、渦巻螺旋文は⑦、S 字状文や蛇行状文様は⑧・⑨が該当する。
- (4) 今福氏は、玉抱三叉文を意識した文様構成になることと考えると、
「円盤状の頭部形態から変化したもの」（今福 1998, P124, 9～10 行）としている。その記述が意味するところにはいくつかの可能性もあるが、氏が作成・掲載した図（本稿図 4- (2)）における I と II の関係から推すなら、本稿で言うところの C 2 類④から D 1 類①への展開を想定されているように理解される。
- (5) なお、冒頭で問題とした河童形土偶は段階 3 に現れたもので、頭部上面に霊的存在が取りつたための〈うつろ〉を表現したものである。逆台形で皿状の上面をもつ頭部そのものが、いわば受け皿として造形されたものとする。
- (6) たとえば図 5 の 19 や 22 は頭部の上面に④、前面に⑫を配置し、23 は上面に⑦、前面に④を配置して造形したものである。
- (7) 本稿で何度も登場する今福利恵さんは 2020 年にご逝去された。初めてお会いした 2000 年の夏以降、親切にお付き合いくださっていた。櫛原氏の成果と共に、本稿でもその成果を全面的に引用・活用させていただいたが、この主題に関してもまたご教示願いたいところだった。ご冥福をお祈りしたい。

文献一覧

- 青木義修（1987）「浦和市井沼方遺跡発見の土偶」『考古学ジャーナル』272 ニュー・サイエンス社
- 市川恵子（1999）「縄文時代前期板状土偶から中期河童形土偶へ 御坂町桂野遺跡出土土偶に関する一考察」『研究紀要』15 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 伊藤正人・川合剛（1993）『名古屋の縄文時代資料集』名古屋市見晴考古資料館
- 今福利恵（1998）「中部高地の縄文中期前半における土偶の基礎的把握」『土偶研究の地平』2 「土偶とその情報」研究会
- 今福利恵（2000）「中部地方の初期立像土偶の成立と展開」『土偶研究の地平』4 「土偶とその情報」研究会
- 岩崎孝次（2021）「縄文ビーナスの用途・機能について」『京都橘大学大学院研究論集』文学研究科第 19 号
- 小野正文ほか（1987）『釈迦堂遺跡群』山梨県立埋蔵文化財センター
- 瓦吹堅（1994）『特別展東国の土偶』茨城県立歴史館
- 櫛原功一（1998）「山梨県の縄文時代中期土偶—有脚立像土偶の出現をめぐる—」『土偶研究の地平』2 「土偶とその情報」研究会
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター（1994）『西ノ前遺跡』
- 斉藤尚己（1985）「北上川流域の土偶について」『日高見国』菊池啓治郎学兄還暦記念会
- 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会（2014）『相谷熊原遺跡』I
- 篠原正（1986）「金堀遺跡出土の土偶に関する一考察」『研究紀要』1 財団法人印旛郡市文化財センター
- 瀬口眞司（2013）「土偶とは何か—図像に残された意図から用途と役割を探る」『紀要』26 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

- 瀬口眞司（2015）「初期土偶の根本的性質と展開過程」『古代文化』67- 3、公益財団法人古代学協会
- 瀬口眞司（2018）「前期土偶の根本的性質と展開過程」『紀要』31 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司（2019）「土偶とは何か」『考古学講義』ちくま新書
- 瀬口眞司（2020）「土偶装飾付土器の根本的性質と展開過程」『紀要』33 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司（2021）「土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論」『紀要』34 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司（2022）「円筒上層式土器における土偶意匠の展開と実態」『紀要』35 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 茅野市教育委員会（1990）『棚畑』
- 千葉市文化財調査協会（1992）「中鹿子第 2 遺跡」『千葉中央ゴルフ場遺跡群発掘調査報告書』
- 原田昌幸（1995）『土偶』日本の美術第 345 号 至文堂
- 原田昌幸（1997a）「発生・出現期の土偶総論」『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究会
- 原田昌幸（1997b）「発生・出現期の土偶について」『土偶シンポジウム 6 奈良大会 西日本をとりまく土偶 発表要旨集』
- 原田昌幸（1998）「発生・出現期の土偶から中期の土偶へ」『土偶研究の地平』2 「土偶とその情報」研究会
- 藤森栄一ほか（1965）『井戸尻』中央公論美術出版
- 船橋市遺跡調査会（1991）『小室上台遺跡』
- 三重県埋蔵文化財センター（1997）『粥見井尻遺跡発掘調査報告』
- 茂木由行（1983）『黒熊遺跡群発掘調査報告書』(3) 群馬県吉井町教育委員会
- 茂木由行（1988）「黒熊第 5 遺跡」『群馬県史資料編』群馬県史刊行会
- 本沢慎輔（1982）『雫石町塩ヶ森遺跡』岩手県埋蔵文化財センター
- 八尾町教育委員会（1985）『長山遺跡発掘調査報告』

挿図典拠

- 図 1 1. 滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2014、2. 千葉市文化財調査協会 1992、3. 船橋市遺跡調査会 1991、4. 斉藤 1985、5. 三重県埋蔵文化財センター 1997、6. 瓦吹 1994、7. 青木 1987、8. 櫛原 1998、9. 小野ほか 1987、10. 市川 1999、11. 本沢 1982、12. 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1994、13. 茅野市教育委員会 1990、14. 藤森 1965、15. 八尾町教育委員会 1985
- 図 2・3 瀬口作成
- 図 4 今福 1998、櫛原 1998 より転載
- 図 5～8 表 1 に掲載
- 図 9・10 図 5～8 から編集・転載
- 図 11 瀬口作成

（せぐち しんじ：総務課 企画室長）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.36 2023.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages